
「令和5年度 飼料用米多収日本一」 東北農政局長賞受賞者の取組概要

(敬称略)

単位収量の部

1

福士 浩樹

地域の平均単収からの増収の部

2

小野寺 忠孝

1 ふくし ひろき
福士 浩樹（青森県五所川原市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	10.7ha	791kg/10a	118kg/10a(673kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子夫婦)
- リンゴ収穫時期に臨時雇用あり

【作付品目】

- 主食用米 まっしぐら 1.5ha
- 飼料用米 ゆたかまる 10.7ha
- リンゴ 0.8ha

【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、地域の農業者とともに平成27年から飼料用米に取り組む。

【取組概要】

- それまで作付けていた「みなゆたか」よりも、多収性に優れた品種「ゆたかまる」を3年前から選定。
- 施肥管理は、①ケイ酸質土壌改良材(ケイカル)と、もみ殻を燃やした灰をほ場に施用し、②一部ほ場では稲わらのすき込みも行い土作りを行っている。③基肥は高窒素成分の一発肥料(水稻一発らく省コート077多収米用100日)を用いて窒素成分12kg/10aをブロードキャスタで施用し、④葉色を見て高窒素成分の肥料(ちょいまきN30)を施用することで、多収を実現している。
- 生産コスト低減を図るため、①家族で事前に役割分担の打合せを実施し、作業分担により所有する機械を効率的に利用することで労働費を削減、②播種量を150g/箱→250g/箱と密度をあげ、箱数を削減、③プール育苗により水管理の時間短縮、④60株/10aで疎植栽培を実施、⑤病害虫防除は地域の共同防除により省力化、⑥フレコン出荷し運搬経費等の削減等の取組を実施している。
- 雑草防除については、除草剤2種(シンウチEW、エリジャン乳剤)を田植え前に散布し、田植え後に別の除草剤(天空ジャンボ)を畦から投げ込みにより散布している。
- インターネットを通じて、上記の新しい技術を情報収集するとともに、実践している。



青森県

五所川原市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
たわわっこ	2.3ha	669kg/10a	195kg/10a (474kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と妻)
繁忙期(春、秋)は2～3人(親族)を
臨時雇用し最大5人で作業
- 水稻を中心に、きゅうり等も作付け

【作付品目】

- 主食用米 あきたこまち 1.5ha
- 飼料用米 たわわっこ 2.3ha
- きゅうり 0.03ha
- 自家消費花卉 0.06ha

【取組のきっかけ】

- 経営が安定することに魅力を感じ、平成23年から飼料用米の栽培に取り組んでいる。

【取組概要】

- 多収が期待でき、耐倒伏性に優れ、いもち病耐病性がある「たわわっこ」を平成30年から取り組んでいる。
- 多収を実現するため、①たわわっこの品種特性(分げつが少なく穂重型品種)を考慮し、1株当たり4～5本、株間18cmで植え付け、②毎年、稲わらをすき込み、③基肥は、コーティング肥料の飼料用米専用肥料(成分:N24、P12、K12)40kg/10aを田植え同時側条施肥で施用している。これらの取組により、追肥を行わずとも多収を実現している。
- また、令和元年まで、一部のほ場で紋枯病が発生していたため収量が増えなかったが、県の普及指導員からの勧めもあり、従来から使用していたツインターボ箱粒剤からエバーゴルフオルテ箱粒剤に切り替えたことで、約1,000円/10aのコスト増となったものの、収量が約60kg/10a以上増加している。
- 作業の省力化・生産コストの低減を図るため、①プール育苗により水管理の時間短縮、また、慣行の水管理と比べ病気も少ない、②播種量を190g/箱まで密度をあげ、箱数を削減、③フォークリフトで苗箱、フレコン等の運搬を行い省力化、④病害虫防除(エバーゴルフオルテ箱粒剤)及び雑草防除(ソルネット粒剤)の初期剤の散布を田植え同時側条施用とすることで省力化、⑤収穫前に水分値が19～23%になるまで立毛乾燥を行い、乾燥コストを抑制、⑥紙袋からフレコンに切り替えることで、出荷・運搬作業等で省力化の取組を実施している。



岩手県



野田村